

2 2 5

こんにちは。塾長の大井です。

6期生受験戦記第10回です。

学校への想いと私たちへの信頼が篤かったのは、YくんもTくんに負けていませんでした。

帰国子女で甘えんぼのYくんは、国語が頭を抱えるほどのレベルからのスタートでした。無理からぬことですが、当初は日本語を流暢に自然に使うことができません。私は何度も何度も彼の語感を鍛え、手垢のついた自分の言葉になるまで、日本語と向き合わせました。そしてYくんは技術だけでなく心でも、私の話の一つ一つを吸収しようとしていました。

それでも外部模試の結果はずっと国語で足を引っ張っていました。

7月偏差値40台から始まり、一旦50台に乗ったものの、10月にまた40台に落ち込んだ時、たまりかねたご両親が直談判に来られました。それでも私には自信がありました。そして、今までも軸だった授業と解き

直しを徹底して続けることを変えませんでした。

プロとして大切なことですが、私は自分の教える力に確信を持っています。(田宮も同様です。)私の真似をすれば、必ず国語は得意になれる。それを自分は知っていますが、親御さんには数字で示すしかありません。それもまたプロの鉄則です。

Yくんは、必死で私の真似をしました。そして、この真似が本当に実を結んだのです。

残り2回となった外部模試の国語で、自己ベストを大きく更新する偏差値63をマークし、最後の外部模試でも偏差値60を超えました。

誇大広告でしか見られないような数字の跳ね上がり方でした。それでもそれがTOPのrealです。そして何よりすばらしいのは、出来るまで追究し続けたYくんの覚悟でした。

キャプテンという立場は彼に自覚を呼び起こし、やがてそれは自信へと成長していきました。

励まされる、背中を押される、可能性を信じてもらう。それは決して悪いことではありません。私たちも何一つ惜しみません。

それでも、本当の自信は自分で勝ち獲るしかないのです。TくんもYくんもそこを譲らなかった。

まだまだ答案に軽さが目立つ7期生(現小6)には、本当にこの姿勢を受け継いでもらいたいと切に願っています。

(第11回につづく)

2020年12月5日

大井 雄之